

編輯後記

筆を採つて本稿を起こした當時、未だ上田を回る山々は、突兀として其の白容に思はず襟を正したものであつたが、出来上つたけふ此頃は、世は全く深緑の海に化して、高原の夏装眼に甚だ爽かである。

紫電一閃！ 遂に徒に三ヶ月は流れて了つた。

其間に原稿は思ふやうに集らない、編輯者が柄にも無く病床に就く、切角原稿が集つたと思ふ、此度は印刷所の方で思ふ様に捗らない、かくて難産を重ねて辛やく産れは出たが、氣に入らない所だらけである。

抑も、此度の雜誌は『會員のもの』と云ふことをモットーとして萬事を進めた次第であるが、最初のこゝでもあり其の趣旨も一般に徹底して居らなかつたし、且つ編輯者も不慣れであつたから、思ふ萬分の一も表はれなかつた。御叱諍は謹んで受ける、然し今度はと云ふことを期して擱筆する。

最後に會員各位の御健康を祈る。(五、三〇)